源太郎は、俳句をつくるときは、破籠師という名まえをつかいました。牡丹を育てながら、俳句にも力を入れ、すぐれた作品をどんどん発表しました。

ところが、昭和に入ってからまもなく、日本の経済はふけいきになり、牡丹園の経営もたいへんな時代をむかえました。しかし、しんせきなどの助けをかりて、ようやく苦しさからぬけだすことができました。

そのころのことを、福島大学経済学部教授、大河原精一郎先生は、福島民報に

「このごろ須賀川のぼたん園が、けいざい上の苦しみから、たおれそうだということをいくども新聞でみたが、須賀川のぼたん園の花がひらいたことを耳にするたびに、ぼたん園を愛するわたしは、心配でいても立ってもおれない気持ちになってくる。須賀川のぼたん園があるというだけでも、わたしとしては非常にありがたく思っている。もともと名勝の土地を守っていくことが、ただひとりの人にまかせられていることなど、およそ無理なことである。須賀川のぼたん園が、柳沼さん一家の力でささえられてきたことは、おどろくほどりっぱなことであり、